

2025年度  
東大・国立選抜【iP class(東大専科)】試験

# 国語

時間50分、100点満点

受験上の注意

1. 解答用紙には、受験番号・氏名を記入すること。
2. 解答は、解答用紙の所定のところに記入すること。  
記入方法を誤ると得点にならない。
3. 試験終了の合図とともに、解答用紙・問題用紙とも回収される。

郁文館高等学校

著作権の関係により、問題の一部を非公開としています。

著作権の関係により非公開としています

著作権の関係により非公開としています

著作権の関係により非公開としています

著作権の関係により非公開としています

著作権の関係により非公開としています

□ 次の文章は川端康成の「油」（一九二五年発表）という小説である。この文章を読み、後の問いに答えなさい。表記は出版時のものに依った。

父は私の三歳の時死に、翌年母が死んだので、両親のことは何一つ覚えていない。母はその写真も残っていない。父は美しかったから写真が好きだったのかもしれないが、私が古里の家を売った時に土蔵の中で、いろんな年齢のを三四十種も見つけた。そして中学の寄宿舎にいた頃には一番美しく写った一枚を机の上に飾ったりしていたこともあったが、その後aイクトも身の置きどころを変えるうちに、一枚残らず失ってしまった。写真を見たって何も思い出すことがないから、これが自分の父だと想像しても実感が伴わないのだ。父や母の話をいろんな人から聞かされても、親しい人の噂という気が矢張りしないので、直ぐ忘れてしまう。

私が高等学校に入学して東京に来ると、十何年振りで会った伯母が私の成人を驚いて言った。

「親はなくとも子は育つ。お父さんやお母さんが生きていたらどんなに喜ぶだろうね。お父さんやお母さんが死んだ時には、無理を言つて困った。仏の前で叩く鉦かねの音が大変嫌がつて、その音を聞くと泣きむずかるもんだから、鉦は叩かないことにしたんだよ。その上仏壇の※1燈明とうみょうを消せと言うんだもの。消すばかりでなしに、蠟燭ろうそくを折つてしまうし、※2かわらけの油を庭に流してしまうまで、疳かみを鎮めないんだからね。お父さんの葬式にはお母さんが泣いて怒っていた。」

従姉から聞いたような、父の葬式で家が賑かになったのを私が喜んでしたことや、また、棺に釘を打たせまいとしたことも、ちつとも覚えていない。ところが、伯母の話にはこちらが忘れていた幼な友だちに声を掛けられたような親しみを感じた。かわらけを持ち手を油で汚している幼い私の泣面なみづらが浮んで来た。この話を聞くと直ぐに古里の庭の※3木斛もくこくの木が私の心に見えた。十六七まで毎日私はその木に登り、幹の上へ猿のように坐つて本を読んでいたのである。

「油を零こぼしたのは、あの木斛と向い合ったbサシキの縁側の手洗鉢ちやうずばちの横だった。」などということまで思い出した。しかし考えると、父母の死んだのは大阪の近くの淀川べりの家だ。今思い描くのは淀川から四五里北の山村の家の縁先だ。父母が死ぬと間もなく淀川べりの家を毀こわして古里へ帰ったので、川べりの家のことは少しも覚えていないから、油を零したのも山の家らしく思われるのだろう。それから、場所も手洗鉢の横とは限らないし、かわらけは私の手にあるよりも母や祖母が持っているほうが自然である。また、父の時と母の時との二度が一度として、或は同じことの繰り返しとしてしか思い浮べられない。細かいことは伯母も忘れている。私が記憶と思うものは多分空想なのだろう。しかし私の感情は却つてこの怪しいなり曲つたなりを真実として懐しみ、人聞きなのを忘れて自分の直接の記憶であるかのような親しみを感じている。

—— この話は生命あるかのように不思議な働きを私の上に加えた。

父母の死の三四年後に祖母が死んだ時とか、またその三四年後に姉が死んだ時とか、そのほか、折々私を仏壇に礼拝させる度毎に、祖父は必ず※4燈心の灯を蠟燭につけ変える習慣だった。このことは伯母の話を耳にするまで、なぜ祖父がそうするのかと訝いぶからずに、ただその事柄として頭に残っていた。私は何も生来鉦の音とか油の灯とかが嫌いだったのではあるまい。祖母や姉の葬式の時分には、父や母の葬式に油を捨てさせたことを忘れて、燈心の燈明でも平気だったかもしれない。しかし、祖父は油の燈明を私に礼拝させはしなかった。そして伯母の話を聞いて初めて私は、このことのうちに含まれた①祖父の悲しみを知ることが出来たのだった。——可笑しいことには伯母の話によると私は父母の葬式に蠟燭を折

り油を庭に流したのに、祖父は明りを蝟燭に移している。私も油を流したのはぼんやりと思い浮ぶが、蝟燭を折ったのはちっとも覚えていない。蝟燭のほうは多分伯母が記憶の誤りか話の調子で誇張したのだろう。また祖父は仏前の油の方こそ私に見せなかったが、私が中学に入る頃まで二人は油の灯で暮らしていたのだ。祖父は自分が半盲で明るくても暗くても大した変りがないために、古風（あらどん）の行燈（あんどん）を石油ランプ代りに使っていたのだ。

私は虚弱な父の体質を受けた上に※5月足らずで生れたので、cセイイクの見込みがないように見えた。小学に通う頃まで米の飯を食べないような有様だった。嫌いな食物が多い中でも、※6菜種油の臭いのする物を口に入れると、きまって吐いた。小さい時dケイランの焼いたのは※7落焼でも※8巻焼でも非常に好きだったが、焼く時鍋に菜種油を引くことを思うと、焼けてから臭いがしなくても嫌だった。鍋についていた表面をきつと祖母か女中かに剥かせてから食べた。食の進まない私のために、この面倒は毎日繰り返されていた。またある時、行燈の油が一滴沁みたく着物をなんと言われても二度と着ようとせず、そこを切り抜きを当てさせてから、やつと気味悪そうに手を通したことがあった。今日まで私は油臭いのに敏感だった。単純に油の臭いが嫌いのつもりでいた。しかし伯母の話聞いて初めて私は、このことのうちに含まれた私の悲しみを知らることが出来たのだ。仏前の油の灯を嫌がった私に父母の死は油の臭いとして沁み込んでいたのかもしれないのだ。また油嫌いの我儘（わがまま）を許してくれた祖父母の気持も、伯母の話から初めて想像出来たというものだ。

私も少年時代には、父の写真を机の上に飾っていたように、「孤児の悲哀」を甘い涙で悲しみ、それを訴える手紙を男や女の友だちに書いた。

しかし間もなく、孤児の悲哀が何物だか少しも分っていない、と言うよりも、分るはずがないのだと省るようになった。両親が生きていたらこうだが、死んだからこうだったのだと、この二つのことがはつきり分つてこそ孤児の悲しみだが、事実死んでいるのだから、生きていたらどうだったかは神だけが知っているのだ。若し生きていたら更に不幸なことがなかったとも限らないではないか。それなら顔も知らない父母の死のために流す甘い涙は幼稚な感傷の遊戯なのだ。しかし痛手にはちがいない。この痛手は自分が年を取って一生を振り返った時に初めてはつきりするだろう。その時までには、②感情の因習や物語の模倣で悲しむものかと思つた。

そして私の心は張りつめていた。

しかし、そうした③意気張りが却つて私をいびつなものに行っていることを、高等学校の寄宿寮で私の生活が自由にのびのびとして来た頃から気づき初めた。そうした心が私の心の傷や弱身をA意固地にかばうほうにばかり働いていたのだ。悲しむべきを素直に悲しみ、寂しむべきを素直に寂しみ、その素直さを通してその悲しみや寂しみを癒すことの邪魔をしていたのだ。前々から私は、明らかに幼い時から肉親の愛を受けないことに原因している恥ずべき心や行を認めて人生が真暗になることが度々ある。そんな場合、「ええい。」と投げ出したくなる心持を殺し、静かに自分を哀むように傾いて来た。劇場や公園やいろんな場所で幸福な家庭の親兄弟姉に連れられた子供とか、子供らしい子供同士でいるのとかに、何気なく見惚れ、見惚れている自分を見出してほろりとし、ほろりとする自分を見出して、「馬鹿。」と叱ることがあった。しかし、その叱る自分がいけないのだと思うようになった。

父の三四十枚の写真を何時となくすっかりなくしてしまつたように、死んだ肉親などにはこだわらなくなればいいのだ。孤児根性が自分にあるなぞと反省しなければいいのだ。

「まことに美しい魂を自分は持っている。」



ひそかに抱いているこの気持を余計な反省の蔭にいじけさせずにB野放図に青空へ解放してやればいいのだ。こんな風な気持で二十歳の私は人生の明るい広場へ出て来た。幸福に近づきつつあるような気がして来た。ちょっとした幸福にも我ながら呆れるほど有頂天になるようになってきた。私は自分 questioning のだ。

「これでいいのか。」

「幼少年時代を幼少年らしく過さなかったのだから、今は子供のように喜んでよろしい。」

こう答えて自分を見逃してやるのだ。やがて来る素晴らしい幸福一つで、私は孤児根性からすっかり洗われそうにさえ思える。永い病院生活を逃れた予後の人が初めて目にする緑の野のように、その時は人生が見えるだろうと待ち遠しい。

こんな風に気持が移って来た私には、伯母からの話を聞き、あれらのことを思い当ったeシュンカンが生きていた。父母の死で受けた痛みの一つからC忽然助かったなと直覚したからだ。ために、④菜種油臭いものを食べてみようと思いついた。そして不思議に食べられるようになった。菜種油を買って来て指先につけ、なめてみたりした。臭いも敏感に鼻に来るが気にならなくなった。

「この調子。この調子。」と私は叫ぶ。

この変化もいろんな風に考えられる。父母の死とはなんの関係もなく生来油が嫌いだったのに、助かったなと喜ぶ心が打ち勝って、なんでもなくなったとも言える。しかし、父母の死を悲しむ心がふと仏前の燈明に宿り、その油を庭に棄てたことから油を憎むようになり、その因果関係を忘れながらも油を嫌っていたのが、父母の話で偶然原因と結果とが結びついたためだと、無理にも言いたい。

「油からだけは助かりましたよ。」と、痛手の一つを実に明かに癒した証拠として⑤信じたのだ。

幼い時肉親達に死別したことが私に与えた影響は、私が人の夫となり人の親となり、肉親達に取り囲まれるまで消えるはずがないとも考える。不断の浄心も大切だ。しかし、この油のようにひよいとした機会で、私の心のいびつから助かることも、第二第三と続かないとも限らないだろうと望んでいる。

人並の健康になり、長生きし、魂を高く発展させて、自分一生の仕事を果したい希望が増々強く働いている。油のことで浮き浮きした拍子に、身体のため肝油を飲んでやろうと微笑み、この油臭いものが毎日咽を通るようになった。しかも飲む度に、亡き肉親達の冥護が私の身に加わっているような気さえする。祖父も死んでから十年近くなる。

「⑥明るくなりましたね。」こう言って、親達の仏前に油の※9御百燈を花々と献じてやりたいものだ。

「油」(川端康成)より

語注

※1 燈明：神仏に供えるともしび。昔は油を使い、油皿を用いて火をともした。現在はろうそくや電球が一般的。

※2 かわらけ：素焼きの杯のことで、ここでは燈明をともし油皿のこと。

※3 木斛：ツバキ科の常緑高木。 ※4 燈心：燈明の火をともし芯。

※5 月足らずで生れた：胎児が母親の胎内に十カ月未満に生まれてくること。

※6 菜種油：菜の花の種子から作った油。行燈用や食用の油となる。 ※7 落焼：目玉焼きのこと。

※8 巻焼：現在のたまご焼き。 ※9 御百燈：数多くの燈明をつけて霊を供養すること。

問一 波線部 a e のカタカナを漢字にしない。

問二 傍線部A「意固地に」、B「野放図に」、C「忽然」の本文中における意味として最も適切なものの記号で選びなさい。

A「意固地に」

- 1 态意的に
- 2 執拗に
- 3 陰湿に
- 4 こつそりと
- 5 殊更に

B「野放図に」

- 1 生意気にも
- 2 何も考えず
- 3 嬉々として
- 4 勝手気ままに
- 5 殊勝にも

C「忽然」

- 1 急に沸き起こる様子
- 2 運がよい様子
- 3 めったにない様子
- 4 不思議な様子
- 5 安堵した様子

問三 傍線部①「祖父の悲しみを知ることが出来たのだった」とあるが、「私」は祖父のどんなことを知ったのか、最も適切なものを記号で選びなさい。

- 1 祖父がいつも燈心の火を蠟燭につけ変えたのは、祖父が半盲で明るくとも暗くとも大した変わりがないために、蠟燭の火で十分だという祖父の老いと病弱さのためだったという悲しい事実を知った。

- 2 祖父が油をさした燈明を「私」に礼拝させなかったのは、「私」の父母、そして姉が次々と亡くなつていき、祖父の唯一の肉親である「私」のわがままを許そうという祖父自身の孤独な思いのおかげだということを知った。

- 3 祖父が「私」に油をさした燈明を礼拝させなかったのは、燈明の油のにおいが父母の死を思い起こさせ、「私」を苦しませることがないようにという祖父の悲しいまでの思いやりのおかげだということを知った。

- 4 祖父が燈心の火を蠟燭につけ変えて、決して「私」に燈明を礼拝させなかったのは、「私」が父母の葬式で燈明を消せと泣き騒いだのを祖父が記憶し、孫のためにいつまでもそれを忘れずにいた愛情のおかげだということを知った。

5 祖父が「私」に燈明の火を札押させなかったのは、「私」がもともと油のにおいが嫌いだったために、食事も衣服も油くさいものなら何でも我慢できない幼い「私」のわがままを許す祖父の優しさのおかげだったことを知った。

問四 傍線部②「感情の因習や物語の模倣」とあるが、これによって「私」がとった行動を本文から十八字で抜き出しなさい。

問五 傍線部③「意気張り」とは「私」のどんな心情のことか、最も適切なものを記号で選びなさい。

1 両親が生きていたらこうだ、ああだと論じる世間の勝手な言い分に対して、両親は実際死んでいるのだから、生きていたらという仮定は成り立たないだろうという強い反発。  
2 両親が死んだ悲しみを背負い他の幸福な家庭の親兄弟に連れられた子供に見とれた自分を嫌悪し、嫌悪した自分をさらに叱るといういつまでも自己撞着から抜け出られない激しいいらだち。  
3 両親が死んでしまったことの孤児の悲哀により、思わず甘い涙が流れるのをぐっとこらえて、自分は幸福に近づきつつあると思ひ込もうとするかたくなな心。  
4 父母のいない孤児は哀れな存在だという世間の思い込みや固定観念を真に受けて、自分で自分を憐れみ、父母のいないことを悲しむことは絶対にするまいという強い覚悟。  
5 いつか大人になって一生を振り返れば、父母がいないことを悲しむ孤児の涙は幼い子供にとって当然のことだったと思うだろうという未来への予測。

問六 傍線部④「菜種油臭いものを食べてみようと思ひ立った」とあるが、なぜそんなことを思ひ立ったのか、その理由として最も適切なものを記号で選びなさい。

1 油臭さは父母の死と結びつき、「私」の心の痛手の象徴であったため、敢えて菜種油臭いものを食べることで、本当に孤児根性から解放されたのかを確認するよい機会だったから。  
2 油のにおいと父母の死に因果関係があるのかどうかは実際には不明なので、実際に食べてみて生来油が嫌いだったのか、父母の死を悼む心によって油を嫌いになったかを確認しようと思ったから。  
3 父母の葬式でかわらけの油を捨ててしまったかすかな思ひ出にずっと苦しめられてきたため、菜種油臭いものを食べることができれば、その思ひ出を乗り越えられると思ったから。  
4 子供のころ虚弱体質で菜種油のにおいのするものを食べると必ず吐いていたために、大人になった今や子供のころの食べ物への好き嫌いがなくなったかを確認するよい機会だったから。  
5 油は父母の葬式のかすかな思ひ出であり、「私」の孤児の悲哀そのものであったため、敢えて菜種油臭いものを食べることによって、その孤児としての暗い記憶を葬り去ろうと思ったから。

問七 傍線部⑤「信じたい」とあるが、その理由を六十字以内で答えなさい。

問八 傍線部⑥「明るくなりましたね」とあるが、この言葉から「私」のどんな心情を読み取ることができるか、最も適切なものを記号で選びなさい。

1 半盲でありながら幼い自分を育ててくれた祖父がなくなって十年近くなり、父母の葬式の記憶と結びつく油を幼い「私」の身の回りから排除してくれた祖父の肉親としての優しさに改めて感謝したいという思い。

2 自分は今まで孤児根性で卑屈に悩んばかりいた憂鬱な人間ではなくなり、明るい人間になり、作家としての一生の仕事に邁進していききたいという希望を亡くなった肉親たちに顕示したいという思い。

3 今では菜種油どころか、健康に良く油臭い肝油さえ飲み干すことができるようになり、これも今は亡くなってしまった肉親や祖父たちの御加護のおかげであると、自分の健康と幸福を報告したいという思い。

4 幼少時に肉親と死別したことによる深い影響から自分は内向的で悲観的な人間だと思い込んでいたが、伯母の話から実際は明るく活発な面があることを知り、それも亡くなった肉親達のおかげかもしれないという思い。

5 孤児根性という甘くも幼い自己憐憫や、父母の死の象徴である油のにおいからも解放され、明るく幸福な感情を抱くことが出来るようになったのも亡くなった父母や育ててくれた祖父のおかげだと感謝したいという思い。

問題はこのページで終わりである。

このページに問題はない

受験番号	
氏名	

[illegible]